

「出会い」をつくる ～ありがとう桃太郎～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



東日本大震災の年に入学した3期生が卒業式を迎えます。4年間の大学生活で、かれらは多くの「出会い」を持ってくれたようです。「出会い」とは、「異なる二つのものが、互いに受け容れあって(受容)、そこに信頼、友情、尊敬などの新しい何かが生まれること(創造)」と、とらえています。言わば、太鼓と太鼓のバチのようなものです。太鼓と太鼓のバチが、自己主張しながら、他を受け入れ合って、そこにリズムが生まれます。

「出会い」の思い出と言えば、55年前、小学6年の時の「誕生会」があります。5年生の時から、担任の先生は学期毎に、半日使って、班ごとに出し物をする誕生会をしていました。

6年生の2学期終わりのそれには「チャンバラ桃太郎」にしました。もう種切れでした。主役の桃太郎役には、S君を指名しました。彼はチャンバラ大好き人間。いつも腰に物差しを差して歩いていました。実は、S君は、自分の名前がやっとなり書ける程度の学力でした。5年生の時からは彼の世話係。彼は授業中も私の方を振り向いては、にっこり笑っていました。

「桃太郎」は大成功でした。小学校6年間の思い出の絵として彼が選んだのは「桃太郎」。画用紙から顔がはみ出た絵は、お世辞にも上手とは言えませんでした。彼は、小学校を卒業すると、児童施設に入りました。私も彼のことを忘れていました。

中学2年生の年末、お母さんからの電話で彼の家に駆けつけました。玄関を開けると、いきなり仏壇のS君の遺影が目に入りました。仏壇からお母さんが取り出したのは、あの「桃太郎」の絵でした。「あの子がね。施設に行っても、この絵だけは、離さんかったんよ。部屋の壁に貼って、誰が来ても、いつも『これ、おれや、これ、おれや』と言ってたんよ。ありがとう」

涙で言葉になりませんでした。「桃太郎」の絵に向かって、彼から逃げだしたい気持ちになったことを詫言いました。同時に、この素晴らしい「出会い」に感謝しました。彼の「桃太郎」は、二人に優しくほほえんでくれていました。

社会に出て行く人間開発の卒業生が、どのような「出会い」をしてくれるか、「出会い」をつくってくれるか、楽しみです。

スポーツ指導者を志す学生の 資質向上に向けて

人間開発学部教授 むらかみ けいし 村上 佳司



2020年に東京オリンピックの開催が決まりました。オリンピックでは、競技結果を一喜一憂するだけでなく、様々なドラマが起ります。

2014年ソチオリンピックでは、フィギュアスケートの浅田真央選手がショートプログラムで16位と低迷しましたが、フリーでは自己新記録をマークして見事復活を果たし6位の成績を収めることができました。この様に素晴らしい成績を残すことができたことは、競技者本人の努力の成果であると思いますが、この栄光の陰には指導者たちのサポートが必ず存在します。これまで多くの人間味溢れる指導者から、私は教を請うことができました。その経験から指導者を志す人たちに伝えたいことがあります。

強いチームを作るには、綿密な練習計画の立案、科学的根拠に基づいたトレーニング、厳しい練習などが必要です。しかし、最も重要なことは、選手の意欲を高め、自主的に練習に取り組む姿勢を身につけさせることです。すなわち、「繋がり」の指導

が重要と考え、この指導から指導者と選手の信頼が生まれると確信しています。常に指導者は教育者であるという自覚を持ち、深い愛情を持って選手と接し、目標を達成するまで根気よく、地道に指導を続けることが指導者の使命です。指導者は、あらゆる角度から選手の素晴らしい点を見つけて褒めること、そして、指導者自らの姿勢を通じて選手の心の意欲を喚起させることが大切です。

次に、「知識」に工夫を加え「教養・知恵」に転換し、それを指導現場で実践することが重要と考えます。単なる「知識」では、問題解決のための活きたアドバイスにはなりません。課題の解決を模索し、その過程で決断する方法やタイミングを覚えることが真の「教養・知恵」となります。そのためには、謙虚な姿勢で人の話を「聴く」ことが必要とされ、そのことから、人として成長を遂げることができるからです。

私自身も指導者を志す君たちに大きな期待を込め、共に切磋琢磨しながら歩んでいきたいと考えています。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習

学校現場での実習から多くのことを学びました

よりよい教育実習のために

人間開発学部 教授 宮川 八岐



教育実習生であっても学校現場に行けば「先生」と呼ばれます。嬉しくもあれば照れくさくもあるでしょうが、教職を目指す学生にとっては何とも言えない喜びでないでしょうか。

私にも教育実習の経験がありますし、教員になって管理職時代も含めて25年間、実に多くの教育実習生を受け持つなどして指導に当たり授業研究に取り組みながら教育を語り合ったことを思い出します。本学部においては、教育実習生を小学校にお願いする立場になり、30余名の学生の教育実習指導訪問をしてきました。真剣に学ぶ姿に感心させられたり、事前の指導のあり方について責任を感じたりもしてきました。それらを振り返りつつ今後の学生に向けて3つのメッセージを送りたいと思います。

第一点は、教師の言動は最も身近な子どもたちの言語環境モデルであるということです。そして、よりよく生きようとする人間の模範でもあるという自覚が教育実習生であっても必要だということです。いわゆる若者言葉が授業時に出てしまったり、文字や板書の練習が不十分であったり、発達の段階に相応しくない用語、言葉遣いだったりでは困ります。

第二点は、教材研究の充実です。学生の多くが指導案づくりに苦労したと言います。当然ですが、教科教育法の授業、教育実習 I A (教育実習の手引きの活用)、事前指導などを参考に指導案を作成することです。ポイントを押さえて A 案、B 案を構想して学級担任を感心させた学生がいました。最終責任は学級担任ですから指導通りにしなければなりません、その研究を楽しみたいものです。

第三点は、教育愛に徹するということです。子どもが好き、教えることが好き、やがて社会に出て活躍する姿を夢見て、そんな愛情の眼差しでしっかり一人一人と向き合い、話を聞き、語りかけて、共に考えるのです。その教育的愛情が指導法を見出します。子どもの発言をつないで広げたり深めたりするのです。そこに共感的学び合いが生まれるわけです。そうした教育愛に徹する姿勢と思いは必ず子どもたちに伝わるものです。

教育実習を振り返り

健康体育学科 4年 鎌形 秀人

私は教育実習を経験して、「教師になりたい」という思いが強くなったかという、そうは感じませんでした。学校現場を初めて経験したということもあり、授業が全くうまくいかないなど、苦労したことが思い出の多くに残っているからだと思います。

しかし、それらの苦労から学べることが多くあったことを覚えています。その中でも特に印象に残っていることとして、大きく二つあります。

一つ目は「準備の大切さ」です。教育実習初日に、指導教官の先生から「経験を埋めるのは準備」という指導を受けました。これは学校現場での経験が全くなかった私にとって、最も印象に残っている言葉です。授業を行うためには、その単元や練習の目的、理想、生徒の反応、道具の数や工夫など、多くの「準備」をしなければなりません。初めてだから失敗しても当たり前ではなく、それらの良い準備をすることで、初めて意味のある失敗になるのだと気づくことができました。

二つ目に「教師のやりがい」です。これは、行事を通して特に感じることができました。

合唱コンクールと体育祭に参加させていただき、本番までの過程から、子どもたちの成長を実習生として身近に感じました。また、子どもの成長に関わることで、自分自身を見つめなおすようなきっかけにもなるのではないかと思います。このような体験ができるのも、教師という職業の魅力ややりがいの一つだと思います。

教育実習後の採用試験は多くの人に協力していただき、無事に合格することができました。教育実習での学びが合格の一番の理由だと思います。そして、学校現場での経験が少ない私にとって、四月までの「準備」が本当に大切だと感じています。実際の現場では、教育実習以上に苦労することが山ほどあると思います。ただ、そんな毎日のなかで新たなやりがいや魅力を見つけ、感じ、教師になって良かったと思えるよう、一生懸命頑張っていきたいと思えます。

教育インターンシップ

先生方や子どもたちの姿を通して学んだことは？

平成26年度は初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科の3学科の学生の教育インターンシップの活動が行われました。第2回教育インターンシップ連絡協議会では、学生の報告会も兼ねて行われました。

保育の現場を知る

子ども支援学科 2年 新福 千夏

私は6月から11月にかけて幼稚園で教育インターンシップを行った。日数は7日間で、年中クラスに5回、年少クラスに2回入った。長期的に教育インターンシップを行ったことで、子どもたちが着替えやお弁当の準備などをスムーズにできるようになっていたり、子どもたちの遊びが変化していたりすることに気が付くことができた。また、年少クラスと年中クラスに入る機会をくださったことで、それぞれの発達段階の違いを理解する事ができた。たとえば、年中クラスでは複数人で遊ぶ共同遊びが見られた一方で、年少クラスではひとり遊びをする子が多く見られた。年少クラスの室内遊びの時間に、数人でブロック遊びをしていた子どもたちに対して、何をつくっているのか尋ねると、その一つのもが子どもによって「家」であったり、「学校」であったりした。そのことから、年少クラスの子どもたちは同じイメージを持って一緒に遊ぶのはまだ難しく、年中と年少の違いを感じた。

教育インターンシップを通して最も考えさせられたことは、「保育者としての援助のあり方」である。このことを考えるきっかけとなったのは、年中クラスの子どもたちが午後の外遊びを終えて保育室に戻る場面であった。子どもたちが遊んでいた砂場から保育室に戻るためには、階段かその横にある網目状の綱を上らなくてはならなかった。多

くの子が次々と階段や綱を使って保育室に戻っていく中で、ひとりの女兒が綱の途中で止まっていた。その子は、自分から綱を選んだのだが途中で怖くなって上れなくなってしまった様子だった。そこで、最後まであきらめないで上ってほしいという思いから、私もその子の所まで綱を上り、手足を順番に動かすようにと隣で見せながら一緒に上ろうとした。しかし、その子は少し進んだものの、また怖がって止まってしまった。しばらくして先生が通りかかり、「今日はやめておこうか」と言ってその子を抱え上げて、その子は階段から上ることになった。私はその子の経験を「上れなかった」という思いで一日が終わらないように、「今日は半分まで上れたから次はきっと最後まで上れるね。頑張ったね。」という声掛けをした。

私は保育者として、最後まであきらめないで上れるように援助したいという思いがあった。しかし、私の思いや援助は、その子どもの発達に見合っていたのだろうか、クラス全体の幼児のことが見られていたのだろうか、一日の保育の時間を考えて、援助することが出来たのだろうかと考えた。

この出来事から私は、幼稚園の先生は一日の保育の時間の中でどのように子どもとかわるかを考え、工夫する必要があると感じた。そして、クラス運営を視野に入れた子どもとのかかわり方を今後の学習や実践の中で追究していくことを課題のひとつとしたい。

教育インターンシップ連絡協議会から

学生の報告会では、活動の経験をもとにした話に力が入りました！



校種別討議は、先生方にも参加していただきました！



教育インターンシップ連絡協議会開催

7月24日(木)、12月12日(金)に実施しました



今年度から、子ども支援学科の教育インターンシップが始まり、平成26年度の教育インターンシップに関わる学生数は、初等教育学科82名、健康体育学科38名、子ども支援学科85名、計205名となりました。

7月の教育インターンシップ連絡協議会では、受け入れ教育機関の先生方にお集まりいただき、学生の活動状況と年間の見通しについて情報交換を行い、実施にかかわるご意見をいただきました。

12月の教育インターンシップ連絡協議会は、学生の活動報告会を兼ね、学生と学生の交流や学生と受け入れ校の先生方との交流を充実させることができました。

学生の活動報告は、子ども支援学科2年、郷古知里さんと小関桃子さん、初等教育学科の越路将詩さんと長尾莉沙さん、健康体育学科の篠崎修さんと西村潤也さんの6名が行いました。上麻生保育園の鈴木栄子先生、横浜市立荏子田小学校の京楽文枝先生、横浜市立あざみ野中学校の林美和先生の実施状況についてのお話の後、「子どもとのかかわり方」のテーマで行われた校種別交流では、学生からの活動中の課題について、先生方から、経験をもとにしたヒントをたくさんいただきました。



未来塾

開講講座は「10講座」、延べ受験者数は「508名」でした

今年も「未来(みらい)塾」が開かれました。

講座名	担当	開講回数と受講者数
高山真琴先生の「ピアノ」講座 講座1 ピアノ講座 講座2 幼稚園実習対策ピアノ講座 講座3 教員採用試験対策ピアノ講座 講座4 保育士資格取得対策ピアノ講座 講座5 就職対策ピアノ講座	高山真琴 准教授	69回開講、延べ受講者数69名 42回開講、延べ受講者数42名 75回開講、延べ受講者数75名 34回開講、延べ受講者数34名 75回開講、延べ受講者数75名
上口孝文先生の 柔道基礎力養成講座	上口孝文 教授	24回開講、延べ受講者数144名 昇格審査合格者16名
原英喜先生の 講座1 泳げるようになろう講座 講座2 臨海学校・遠泳プログラムの見学及び小遠泳体験講座	原 英喜 教授	5回開講、延べ受講者数12名 千葉県南房総市 8月に1泊2日 受講者数3名
原英喜先生の 初心者 中級者のための 「体育的、集団宿泊の行事としてのスキーを学ぶ講座」	原 英喜 教授	長野県山内町一ノ瀬にて2泊3日開講、 受講予定者数2名
石川清明先生の 子どもの遊び体験教室	石川清明 准教授	12回開講、延べ受講者数52名